

東大見学会 企業大学訪問

① ディレクトフォース

8月8日の午前、私は東京の霞が関ビルで、笹川平和財団主催のディレクトフォースに参加した。そこでは、義手開発をしてらっしゃる近藤様より、物づくりについての話を伺った。近藤様は、ニーズに合った物づくりをするように心がけているとおっしゃっていた。それは、どういうことかという、一人一人の個性に合ったものを作ることだそう。普通製品とは、規格に合わせて作られるため、すべて、形や機能が同じになる。だが、義手は人間が身に着け、体の一部分として使うものだ。そのため、一人一人の手の使い方や、その人の個性に合わせて作られるのだという。

また、近藤様は海外へ留学した時の話もしてくださった。海外への留学で色々な人の考えや価値観に触れることができたという。そして、安くて使いやすい、より良い義手を作ろうとする同志を世界に持つことができたとおっしゃっていた。

近藤様は、物づくりのこと以外にも、目標とするゴールに達するために大切なことも私に教えてくださった。それは、「手、足、頭を動かし、成功も失敗も味わう」ということだ。私自身も近藤様のこの言葉を胸に刻み、目標に向かって突き進んでいこうと思った。

次に、ディレクトフォース第1クールから第3クールについて。

第1クールでは富士フィルという会社で働いてらっしゃった川崎様に話を伺った。川崎様は、ドイツに14年、中国に2年と、非常に長い期間海外で働いていらっしゃり、「海外で働くこと」についての大変興味深い話であった。私からは、DFの話の内容の一つである「発展途上国」について紹介したい。川崎様は、世界に数か国しかない先進国が、発展途上国をサポートすべきだとおっしゃった。先進国が発展してきた過程を途上国もよく見るべきだという。また川崎様は、海外で働いていたことで自分の世界観が変わり、視野が広がったという。この話を聞き、私もぜひ海外留学などを通して、自分の視野を世界へ向けたいと思った。

第2クールでは、林様より難民・移民問題についての話を伺った。中東における紛争、朝鮮問題などで発生する難民・移民に対して、日本はどのように対処するべきかという話であった。難民や移民を受け入れるかどうかは国のトップ。すなわち政府や政策によって決められてしまう。これでは一見何もできそうな事はないように思える。しかし、林様は私たちにできることは受け入れるのを待つのではなく、自らが困っている人がいる国に行くことが大切なのだとおっしゃった。実際に自分の目で確かめると、自ずと何をしなければならぬかが、わかってくるのだそう。

第3クールでは、若松様より、人とのかかわり方、人の動かし方についての話を伺った。人を動かすためには「5W1H」を明確に伝える事が重要だとおっしゃっていた。わたしは、代議員を務めている。若松様のお話は、代議員を務めていくうえで、また将来的に、自分が人の上に立つて人を動かす上で、大変役に立つものだった。そのほかに、若松様より人と協力するうえで大切なことについても教えていただいた。若松様が最もたいせつにしてらっしゃるのは、コミュニケーション

ョンを頻繁にとることだという。人と協力してものごとを進めていくうえで情報交換は必須だからだ。自ら、情報を発信することも大切だが、人の話に耳を傾けることも大切だとおっしゃっていた。

人間は一人では生きていくことができない存在のため、私も協調性を高めていくと同時に、コミュニケーションを今以上に取るようにしたいと思った。

② 慶応大学病院訪問

同日、午後に私を含むグループは、慶応大学病院神経外科を訪問した。

そこで私は、手術や、手術後の患者さんの心のケアについての話を伺った。まずは、手術についてだが、脳の手術というのは、人間の中枢機関が密集している部位を傷つけないようにしなければならないため、非常に難度が高いという。私たちの質問に答えてくださった三輪先生によると、脳の手術は10時間を超えることが普通にあるという。つまり、脳外科医は、高い集中力を長時間保たなければならないのだ。次に、脳の手術をする前に必ず医師がしなければならないことについてだ。

それは、患者が今後の生活をどのように送っていきたいかということを引き出すということだ。例えば、脳腫瘍が見つかったとする。また、その腫瘍が脳内の深い位置に存在しているとしよう。そうすると、医師には二パターンの手術方法があるという。一つ目は、腫瘍を全摘出できるが体の機能が一部ダメになるというもの。二つ目は、腫瘍は脳を傷つけない範囲で摘出し、体の機能は残すというもの。(しかし、腫瘍が再発する可能性があるという)この選択のみは、患者、または親族の方が決めるしかないのだという。

ここでは、体の機能を残すときの手術の方法を、医師に教えていただいたため、紹介する。患者の身体機能を残すために、覚醒化手術というものがおこなわれている。これは、どういうものなのかというと、頭を開いた後に麻酔から目を覚まさせ、脳に直接刺激を与えながら、話しかけたり、体を動かしてみたりするというものである。刺激を与える場所によっては、言葉を話せなくなったり、体を動かしたりできなくなるというのだ。そこで、刺激を与えて異常があったところは切除しない。異常がないところは切除するという方法を使うことで、術後に体に異常が出ないようにしているということだった。そんな手術方法があるとは知らなかったので、大変驚いた。

最後に術後の患者さんの心のケアについてだ。たとえ、万全を期して手術に臨んだとしても、術後、体に麻痺が残ってしまう患者さんがいらっしゃるという。そのような方々とは一緒に話をしたり、リハビリをしたりして一人で不安に過ごさせないようにしているということだった。

私は、この慶応大学病院で、医者には高い集中持続力と、患者さんの立場に立って対応する力が求められていることを知った。改めて医者の方のすごさ、人間性の素晴らしさに感銘を受けた。

③ OB、OG との座談会

同日、夕食後には仙台二高を卒業し、東京大学をはじめとする名だたる難関大学に通ってらっしゃる先輩方。また日本を代表するような一流企業に就職された先輩方のお話を伺った。

二高を卒業されたということで、お互いに打ち解けて和気あいあいと話ができたことが一番うれしかった。卒業してからも二高生はつながっているのだなと感じられた。この座談会では四人の先輩方の話に共通している部分を見つけることができた。それは、高校生の時にたくさんの努力をされていたということだ。ある先輩は私たちに、「何かつかみたいものがあるならば、全力で取りに行け。

夢や目標は叶えるためにある。今はそのゴールを目指し頑張る時だ」と話してくださった。
この言葉が胸に響き、私はもっとがんばらなければと改めて思った。

④ 全体を通して

私はこの東京研修で、普段の生活では、到底感じることのできない刺激を受けることができた。
この体験は、私のこれからの人生の中において大きな糧になるだろうと感じた。また、まだ鮮明に見えているわけではないが、自分の目標とすべきゴールを見つけられたようにも感じた。

「為せば成る 為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬならけり。」

これは、米沢藩主上杉鷹山のことばだ。

私も、人生の目標とすべきゴールを見つけたからには、強い信念を持ち、必ず成就したいと思う。

最後に、この研修に協力してくださった皆様、素晴らしい経験を与えてくださり本当にありがとうございました。